



被爆地の役割再認識

「ヒロシマ講座」始まる

本紙記者ら参加

平和を考える

全国各地の記者が被爆の実態や平和への思いを学んでいる「ヒロシマ講座」＝28日午前、広島市中区

8月6日の「広島原爆の日」を前に、広島市の被爆の実態や核兵器廃絶、平和への思いなどを学ぶ国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」が28日、同市中区の広島国際会議場で始まった。初日は、識者が広島を担う被爆地としての役割を示したほか、市の担当者や平和への取り組み、被爆者対策の現状を説明した。

講座は市が2002年度から実施し15回目。今回は本紙記者を含む24～35歳の記者8人が参加した。

同市立大広島平和研究所副所長の水本和実教授は「ヒロシマと平和について」と題して講演。原爆の被害の甚大さを身をもって知る広島への役割について、「核兵器の危険性を日々アップデートして訴えること」と強調。70年以上が過ぎた今になって「封印」していた記憶をようやく語り出す人も多く、「今からでも心

のケアが必要」と指摘した。

講座は8月6日の平和記念式典翌日の7日まで。4日間行われる講義では被爆者の証言を聴くほか、被爆体験継承を目指す市の事業や平和教育などについて学ぶ。その後、「平和への思い」を共有した市民らの取り組みを取材する。

(文・写真 石井賢俊)